

27 赤十字の災害救護『情けは人の為ならず』

2026/9/1 白子隆志

この夏、たった1か月の間に令和8年熊本地震、千葉豪雨災害、北陸の豪雨災害など国内で大きな災害が続いています。海外でも、ベネズエラ、コロンビアの地震、ネパール、中国チベットでの土石流災害で多くの死者・行方不明者が出ています。活断層や峡谷、谷あいでは本来数百年～数千年の単位で似たような地震や土石流の堆積が繰り返されてきたはずです。近年の異常気象も影響していると推測しますが人間が本来住んではいけない危険な場所(平らな場所は洪水によって作られた平地)に進出したことも大きな要因と考えます。

皆さんは赤十字の災害救護の歴史について当然知っていますよね？

来年日赤誕生 150 周年になりますが、戦時救護は 1877 年に勃発した西南戦争における負傷者救護で初めての活動(博愛社)を行い、1888年に起きた磐梯山噴火災害における自然災害救護活動が行われました。日赤の救護の歴史は150年まえからあり、日本 DMAT の僅か 20年の歴史に比べはるかに長いものです。それが、国や一般市民の信頼と希望から、日本赤十字社は法律で認められた災害救護を任された医療機関なのです。

当院からも、横田先生、田桐師長、熊谷係長、佐々木看護師、唐澤係長、丸山主任の6名が多忙の中調整していただき、猛暑の中被災地での6日間の救護活動を遂行していただきました。実は現地に赴くだけが救護ではなく、家族、同僚も支援しているわけで病院全体、日赤全体で行うものです。

私の救護の経験では、決して救護活動は我々が被災者に「やってあげる」ものではなく、実は救護する側も多くの経験と喜びを「いただいている」もので、苦しんでいる人を助けたいという「医療の原点」でもあるのです。すなわち「救護」は「**救互**」なのです。

私の災害救護、地域医療のモットーとして、「情けは人の為ならず」というものがあります。これは「情けは人のためではなく、いずれは巡って自分に返ってくるのであるから、誰にでも親切にした方が良い」という考えです。「情けは人の為ならず 巡り巡って己が(自分の)為」ということになります。ところが、「情けをかけることは、結局はその人のためにならない」、だからすべきでないという全く反対の意味だと思っている者も多いと聞いたことがあります。

さて、この「情けは人の為ならず」を科学的に実証したと大阪大学が研究成果を発表しています。研究では、大阪府内の 5.6 歳児 70 人を対象に日常の行動を観察。1 人がおもちゃを貸すなどの親切な行動をとった際、周囲1メートル以内にいた他の児童 1 人のその後 10 分間の行動を、日常時と比較した。その結果、近くにいた児童が「親切を行った児童」に対してとった親切行動は、日常時の1時間あたり 0.47 回から 5.58 回へと大きく増加。体に触れたりして仲良くしようとする行動の頻度も 2 倍以上となり、社会間接互惠性が幼児期から日常生活で発揮されていることが明らかとなったのです。



実際の医療現場で自分のところへの見返りを考えることはありません。日々の診療でも、目の前の苦しんでいる人々を助けてあげたいという気持ちでいます。人間は「他人のため」に何かをすること自体を喜びとするものであり、「他人のため」に一生懸命努力している姿に感動するものです。

その喜び、心の豊かさが赤十字の精神そのものではないでしょうか。



+++『こころの色は赤十字』+++